**アンリ・サン=シモンによる産業体制構想と「管理」の概念**

報告者　白瀨小百合（無所属）

司会者　上野成利（神戸大学）

　自由論題報告に対し、会員から以下の質問・コメントが寄せられた。本事後報告に記載するにあたって、表現に変更を加えている。

【質問】「無益な予算」を削減するにあたり根拠となるのは「有用性」（utilité）の概念と理解したが、サン=シモンにとっての「有用性」の基準は何であるか。巨大な官僚組織を不生産階級とみなすのはアダム・スミスと同型の発想だと思うが、たとえば民間の芸術家やダンサーといった無形のものを生む人々はどのように扱われているのか。

【回答】サン=シモンの思想における「有用性」には、J.-B. セイの規定した政治経済学上の「効用」概念が大きな影響を与えている。セイは各人の需要を満たす品物やサーヴィスの効能を« utilité »と定義し、これを商品価値の源泉ととらえる。サン=シモンの「有用性」も同様に、何らかの価値を生じさせる生産性を持つ（より素朴な意味での）「役に立つ性質」とされる。質問者が指摘するとおり、官僚組織の担い手である貴族・軍人階級はサン=シモンにとっても不生産階級であり、それに対して有形無形を問わず価値あるいは「有用性」を産出する人びとは、生産者＝産業者ととらえられている。したがって、民間の芸術家や音楽家なども（ダンサーについては具体的な言及はないが）産業者に含まれると言える。一方でセイと異なるのは、必ずしも個人の需要と満足の一対一対応で「有用性」概念がとらえられてはいない点である。個人の満足よりも、社会全体にとって有益であることが重視されるが、ベンサムのように各個人の満足の総量を社会の満足とはとらえてはいない。この点において、サン=シモンの「有用性」は、古代におけるutilitas publicaの道徳的価値を含むものではないか、という印象を報告者は持っている。

【コメント1】「発明院」（chambre d’invention）について、現代の議会におけるテクノロジー・アセスメントと似たような発想があるのかなど、自分でも引用箇所を確認してみたい。

【コメント2】Administrationの語義が奉仕から行政や管理の意味に変化していった過程の背景を成す現象の一端として、宮内省の内務省化という事象を考えるのは面白いのではないか。Ministère de la Maison du roiが、Ministère de l’Intérieurへと革命期に転換していった、過渡期的様相を提示する事例については、次の文献がある。Pauline Lemaigre-Gaffier, « Servir le roi et administrer la cour. Les Menus Plaisirs et l'invention de leur personnel (années 1740-1780) », *Hypothèses* 2009/1 (12), p. 51-62.

【コメント3】「自由主義vs.社会主義」というイデオロギー的な二分法ではサン＝シモンの思想を捉えられないというのは、19世紀の社会思想全体をどう捉えるかに関わる問題。この二分法を超えたところにサン＝シモンを位置づけようとするならば、いっそ何か別のフレーズで括れないだろうか。報告最後の「能力主義と平等主義」の「二面性」といったフレーズを膨らませて、「19世紀的なもの」、言い換えれば「社会的なもの the Social」の勃興をサン＝シモンの思想のなかに探れないだろうか。

　紙幅の都合上、各コメントへの個別のリプライを記載することはできないが、いずれのコメントもサン=シモンの思想の現代的意義や、社会思想史における位置づけを再評価するための方向性を示唆する、有意義なものであった。上記の質問・コメントを十分考慮に入れながら、今後の研究を進めていきたい。質問・コメントをお寄せいただいた方々に、深謝申し上げる。